

## 大川小学校へ「サルスベリ」を 「ともだちの樹」として植樹

「稲むらの火の館」の庭園にあった、「百日紅（サルスベリ）」の木を、宮城県の「震災遺構大川小学校」へ「ともだちの樹」として寄贈・植樹しました。

和歌山市青年団体協議会から提案があり、「震災遺構大川小学校」へ「稲むらの火の館」にある木を植樹したいので、提供して欲しいということでした。この青年団体は、東日本大震災の後、毎年年末に和歌山のみかんを運んで、石巻市等被災地へ配布支援している活動を続けています。

この提案を受けて、検討した結果、「館」の駐車場横にあった「百日紅」に決まりました。この度、5月4日に「震災遺構大川小学校」で植樹式が執り行われることになりました。

5月2日に「百日紅」を車に積み込んで、広川町を出発しました。宮城県石巻市までは、13時間、1000キロの旅で、3日に着きました。



「植樹式」には、稲むらの火の館館長、和歌山市青年団体協議会のメンバー3名、震災遺構大川小学校の関係者で合計約20名が出席しました。開会に合わせて全員で黙とうをささげました。

開会にともない、石巻市総務部長阿部氏、震災遺構大川小学校大須館長、稲むらの火の館館長の3人があいさつを行いました。つづいて、和歌山市青年団体協議会の高垣会長から趣旨説明の後、出席者全員が、土をかけて植樹が完了しました。

この日、東北地方にあるテレビ局が4社、新聞

社が3社、取材に来てくれました。植樹完了後に私は共同記者会見で、インタビューを受けました。



植樹の後、場所を「大川震災伝承館」に移して和歌山と大川小学校の関係者で懇談会を開催しました。冒頭、私が「稲むらの火と濱口梧陵そして稲むらの火の館」のテーマで話しました。その後、質疑応答、意見表明等がありました。

### 【震災遺構 大川小学校】

石巻市立大川小学校は、北上川のそばにあります。ただ、この大きな川と学校の敷地の間には小さな支流があります。海から大川小学校までは3.7kmありますが、海拔は1.1mとたいへん低い土地で、それまで津波が来たことはありません。

当時、この学校には108名が在籍していて、欠席、早退、保護者の引き取り等で学校に残っていたのは77~8名で、その内死亡70名、行方不明4名、教員10名死亡という犠牲者を出しました。



運動場から道をはさんで、断崖絶壁ではない山があり、和歌山ならばここは避難場所であったでしょう。少し上がると山崩れ防止の切り通しの広い場所もあります。

50分も運動場で待機をしていたと言いますから、津波避難訓練の経験がなかったのでしょうか。

一度でも訓練をしていれば、こんなことにならなかったのではないだろうかと思いました。

# 百世安堵

関西大学社会安全学部 近藤誠司

## 第27回 防災計画の内在的制約

ユーモラスなカエルが登場するアーノルド・ローベルの絵本シリーズ、『がまくんとかえるくん』には、「よていひょう」という作品がある。

がまくんは、ある日、きっちりとした予定表を作成する。1行目には「あさおきる」と書いてある。まずはこの行を、朝、ベッドの上で目覚めてすぐに消すところから物語が始まる。

「かえるくんのいえへいく」という予定通り、がまくんは、かえるくんの家を訪ねる。そして、「おさんぽする」という予定通りにふたりは散歩に出かける。そこで、事態は暗転、ふたりは災難に見舞われる。予定表が、強風に吹き飛ばされてどこかに飛んで行ってしまうのだ。

がまくんは、途端に身動きできなくなる。なぜなら、予定表に「よていひょうをおっかけてさがす」とは書いていなかったのだから…。

この寓話は、われわれが「計画」に従属してしまうことの愚かさを教えてくれている。立派な計画を立てると、計画していないことが見えなくなったり（視野狭窄）、計画通りにしか物事を見たくなくなったり（否認）、計画外のことに対応できなくなったり（思考停止）、事態が計画通りに進まない「すべては失敗した」と価値づけるばかりになったりする（計画への疎外）。

完璧な「(防災)計画」など存在しない。あくまでも、「現在」の地点から見ることでできる「未来」(リスク)を想定して、内容を規定するしかないからだ。そうした、計画の内在的な制約＝限界を認識していれば、逆に、防災計画は、われわれの人生を豊かなものにしてくれる。計画は、あくまでも「ガイド」であり、「ツール」なのだ。

がまくんは予定表を書きながら、かえるくんという親友の存在をあらためて確かめることができた。「こまったときはかえるくんにそうだんする」。この1行を追記してみよう。

## 【館長日記】

「震災遺構大川小学校」へ「稲むらの火の館」の庭園にあった「百日紅・サルスベリ」の木を「ともだちの樹」として植樹するために、5月2日に広川町を出発しました。冒頭の項にも書きましたが、私の旧知の和歌山市青年団体協議会のメンバーから、石巻市で植樹したいので提供して欲しいとの提案がありました。丁度、稲むらの火の館の周辺整備事業がすすめられている時期でしたので、町当局へこの話を伝え検討していただいた結果、駐車場横に植えられていた「サルスベリ」を贈ることになった訳です。

約1000キロ、13時間位で石巻市へ到着しました。和歌山市を夜7時の出発でしたので、3日朝8時頃でした。植樹式は、4日ですので、3日は石巻市を中心とした伝承施設等を見学しました。大川小学校と同じ震災遺構門脇小学校のリチャード館長は、3月に広川町で開催された「全国被災地語り部シンポジウム」の際、私と一緒にパネルディスカッションに登壇された方ですので、ご挨拶に伺いました。ここは、震災の日は卒業式で、子ども達は帰った後だったので、学校での犠牲者はなかったようです。ただ、津波によって校舎に向かって流されてきた自動車等がぶつかり、発火して火災が発生し、二階以上が全焼したところです。（1階は津波に呑み込まれていた。）

4日は、ほぼ午前中で植樹式が終わりましたの



で、また地元の方の案内で、昼食場所へ向かったのですが、走っている間に、「南三陸ホテル観洋」のそばを通りました。このホテルは、私はこれまで3回

宿泊したところで、3月のシンポジウムには女将さん等3名が来られたのでした。「さんさん商店街」という新しい商店街ですが、ゴールデンウィークですので、どの店も長い行列で、結局、すぐ横の「旧防災対策庁舎」の見学だけでした。

2日間は、津波防災の情報発信のために手を携えることの仲間づくりが出来ました。